

プロ自転車競技におけるドーピングの文化史

——「サバイバル崇拝」と「近代スポーツ」のはざまで——

学習院大学 姫野 宏輔

1 目的

プロスポーツ競技における運動能力向上薬（Performance Enhancing Drug: PED）の使用、つまりドーピング問題は、スポーツ社会学においてたびたび研究対象とされてきたテーマである。先行研究は、勝利を求める競技者の心理的な内面だけではドーピング問題を説明できず、スポーツ医学の発達と社会の医療化[Houlihan 2002]、製薬会社の思惑[伊藤 2013]、スポーツの商業化[Waddington 2009]、スポーツ倫理への過剰な同調[Coakley 2008]など、スポーツを取り巻く様々な要因の組み合わせによってその発生を説明しなければならないことを明らかにしている。

一方、競技種目によって、ドーピング事件が頻発する種目とそうでない種目が存在することは一般的にも知られている。このことはスポーツ競技文化がドーピング問題に影響を与えうるということを推測させる。本報告の目的は、スポーツ競技文化とドーピング問題の関係性を考察することである。

2 方法

本報告では、事例としてプロ自転車競技の競技文化とドーピング問題を事例とする。1998 年のフェスティナ事件や 2012 年のランス・アームストロングの永久追放処分を代表として、プロ自転車競技では選手のドーピング問題が多発していることが知られており、その背景には「運動能力向上薬の使用を認める『寛容の文化』」[Waddington 2009: 訳 198]が存在するとされる。事実、この時代に現役であった選手たちは、プロトン（選手団）全体に薬物が蔓延しており、誰もが薬物を使用していたことから、レース前に薬物を摂取することを「悪」や「いかさま」だとは感じていなかったということの後を後に告白している。この「寛容の文化」がどのようにして形成され、ドーピング問題に影響を与えているのかを明らかにするために、1900 年代から続く古い歴史のあるいくつかのロードレースに分析対象を絞り、それらのレースについての新聞記事や出場選手の回顧録を用いて分析を行う。

3 結果

上記の記事を分析すると、この約百年間に「（1）超人的な距離と難度のコースが設定され、薬物を使用しても完走すること自体が栄誉とされていた『サバイバル崇拝』の時代」、 「（2）レースのテレビ中継が始まり、急速に自転車競技が商業化していく時代」、 「（3）近代スポーツ化した自転車競技においてドーピングスキャンダルが頻発する時代」と三段階を経てロードレースを取り巻く環境が変化していったのに対し、プロトンからは一貫して薬物の使用に対して寛容な言説が発信されていたことが明らかになった。

4 結論

以上から、プロ自転車競技においては、黎明期である「サバイバル崇拝の時代」に形成された薬物に対する「寛容の文化」が保存され続けて現代に至っており、それが近代スポーツとしての自転車ロードレースの諸制度と軋轢を起こし、ドーピング問題を頻発させているのだとすることができる。

これは競技選手個人に反ドーピングの啓蒙を行うだけでは不十分で、競技文化そのものを薬物使用に厳格な文化へと変えていく試みがなければ反ドーピングが達成できないことをも示唆している。ドーピング研究には各種スポーツの競技文化の分析が必要であるということを、本報告の結論としたい。

文献

Jean-Noel Missa and Pascal Nouvel ed., 2011, *Philosophie du Dopage*, Presses

Universitaires de France. (=2017, 橋本一径訳『ドーピングの哲学——タブー視からの脱却』新曜社.)